

不釣り合いな結婚の生態（8）：
「運命と青い外套」の場合
—「共感の通路」を求めて—

宮崎 隆義

Modes of Mismatching (8):
In the Case of 'Destiny and a Blue Cloak'
—Hankering for 'a Congenial Channel'—

Miyazaki Takayoshi

Abstract

'Destiny and a Blue Cloak' (1874) was almost disregarded by Thomas Hardy himself and was not included among any of his collections of short stories in his lifetime. This fact has tended to discourage critics to analyze the story in its potentiality. Hardy wrote this story just before *The Hand of Ethelberta* (1876) and he put it away as dispensable, because some points were, Hardy wrote, reproduced in *The Hand of Ethelberta*. Certainly enough, as R. L. Purdy points out, Old Farmer Lovill seems to be a rough sketch or a prototype for Lord Mountclere. The marriage between Agatha Pollin and him can be regarded to be developed into the marriage between Ethelberta and Lord Mountclere.

If we see this story along the development of Hardy's career as a popular novelist at that time, he seems to have tried his hand at a certain kind of comedy, which was to be performed in *The Hand of Ethelberta* as

its sub-title 'Comedy in Chapters' shows. Comical aspects of Hardy's works are to be minutely discussed in other papers hereafter, but this story seems to show vividly the delicate ballance of the 'more sober' aspect and the comical one in his story writing. This ballance might be reflected in the title 'Destiny and a Blue Cloak' itself.

In the story Agatha Pollin is mistaken for a renowned beauty in the village, Frances Lovill, by Oswald Winwood. Through this mistake 'a congenial channel' is confirmed between Agatha and Oswald who is afterwards informed of his mistake. Their attempt for marriage is to be slyly checked by Frances Lovell, who is to get married to Agatha's uncle, Humphrey, and becoming her aunt conspires to revenge herself on them behind the scene as a kind of 'femme fatale' or 'destiny.'

Agatha's desperate attempt to build 'a congenial channel' with Oswald is baffled by her rival Frances, now her aunt. Ironically enough their rivalry becomes an obstacle for their attempt to make 'a congenial channel' with Oswald and leads them to mismating severally; Agatha with Old Farmer Lovill, and Frances with Agatha's uncle as his second wife.

In this paper 'Destiny and a Blue Cloak' is analyzed from the viewpoint of the theme of hankering for 'a congenial channel,' as part of series of studies of Thomas Hardy's short stories.

I

「運命と青い外套」('Destiny and a Blue Cloak', 1874)¹⁾は、『エセルバータの手』(*The Hand of Ethelberta*, 1876)の前に書かれたこともあり、ストーリーが似通っているが故に、トマス・ハーディ(Thomas Hardy)自身が、4つの短編集に収めることを考えなかった作品のひとつであると言われている²⁾。後の全集への採録の際にもハーディ自身が、この作品を「取るに足らないもの」(trivial)

1) テキストは、The New Wessex Edition, *Old Mrs Chundle and Other Stories with The Famous Tragedy of the Queen of Cornwall* (London: Macmillan, 1977)中のものに依る。

2) Kristin Brady, *Short Stories of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1982) 162.

で「文学的価値の全くないもの」(no literary value)と判断したと言われているために、概して評価はされていないといってよいだろう³⁾。ハーディの短篇小説を研究したクリスティン・ブラディ(Kristin Brady)も、この作品が書かれた頃の概略と他の作品との類似や萌芽的な要素を述べるに留まっており、作品そのものの解釈や評価までには至っていない⁴⁾。しかしながら、彼女の立場から大きく離れるわけではないが、後の作品群を念頭に置いて読んでみるとやはり萌芽的なものが数多く見られるだけでなく、ハーディが述べたように「取るに足らないもの」としてこの作品を切り捨てるには惜しいほどの、いわゆるハーディ的な要素、むしろハーディがその後の幾多の作品の中で追求していった要素や、とかくハーディ作品において指摘されることが少ないユーモアやパロディといったものが見られ、その点でもう少し違った評価の目が向けられてよいものと思われる。

リチャード・パーディ(Richard L. Purdy)などは、この作品に登場する農場主ラヴィル(Farmer Lovell)に、後に書かれた『エセルバータの手』に登場するマウントクレア卿(Lord Mountclere)の素描を見ている⁵⁾。『エセルバータの手』自体が、『狂乱の群れをはなれて』(*Far from the Madding Crowd*, 1874)で新進の小説家として注目を浴びながら、その期待を裏切る失敗作の作品だと酷評されており、ハーディは、その時の弁明として、「このいささか浮薄な物語は、もっとまじめな意図を持った作品を書く合間に出来たもので、一まったく正確というわけではないが一読者を喜ばせる目的のためにコメディという副題が付けてある」(“This somewhat frivolous narrative was produced as an interlude between storjes of a more sober design, and it was given the sub-title of a comedy to indicate — though not quite accurately — the aim of the performance.”)⁶⁾と述べている。その言葉を肯定的に捉えれば、『エセルバータの手』の前に書かれた「運命と青い外套」も、その「もっとまじめな意図を持った作品を書く合間に出来たもの」の一部と考えてよいだろう。またここで‘performance’という言葉に注目するとすれば、ハーディが副題に「章立ての喜劇」(A Comedy in Chapters)と付けたが故の遂行性をほのめかしているとも考えられる。もっともそれはもちろん流行

3) *Ibid.*, 162.

4) *Ibid.*, 162-63.

5) “Farmer Lovell, ... might be called a first crude sketch for Lord Mountclere.”, *Short Stories.*, 162.

6) 1895 Preface to *The Hand of Ethelberta*.

作家として身を立て、作家としての基盤を固めて結婚したばかりの生活に備えるためであったともいえる。

『エセルバータの手』には、ハーディも序文で述べているように、副題として「章立ての喜劇」という言葉が添えられている。ハーディが、『窮余の策』(*Desperate Remedies*, 1871)、『緑樹の陰で』(*Under the Greenwood Tree*, 1872)、『青い目』(*A Pair of Blue Eyes*, 1873)、『狂乱の群れをはなれて』と次々に作品を連載発表していった過程を眺め、その時系列の中で特に『エセルバータの手』に注目してみれば、読者を意識して喜劇的な作品を書こうとしていた彼の意図が窺える。ハーディの喜劇的な要素は今後別の機会に検証してゆくが、『エセルバータの手』の序文で明らかなことは、ハーディが自分の作品について「もっとまじめな意図を持った作品」(stories of a more sober design)と「喜劇」(comedy)的な作品の両方を意識しているということである。このことは、彼の作品において、後の「もっとまじめ」で深刻かつ悲劇的な作品においても、ほんの少し読み方を変えればいつでも喜劇に転じかねない微妙な側面を有していることの原因になっていると考えてよかろう。

「運命と青い外套」をそうした視点で捉えてみると、ハーディの「もっとまじめな意図」を持った作品を書くという意図と、流行作家として、それに対蹠する一般受けのしそうな喜劇的な作品も書いてみたいという意図との狭間で、様々な要素がむしろ生き生きと見られる作品として出来上がっているようである。『エセルバータの手』と似通っていることが、ハーディ自身の否定的な評価とは逆に、むしろ有効に機能して、他の長編作品群や短篇作品群との対比の中で見直すことにより、この作品が持つ本質や魅力を浮かび上がらせることになると考えられる。この点では、ハーディの小説家としての経歴や創作に潜在する彼の統一性を理解するのに都合のよい作品であると見なしてよいかもしれない⁷⁾。特に、滑稽で老獪な農場主ラヴィル(Farmer Lovill)や、弾むような自我を持ったアガサ・ポリン(Agatha Pollin)、影を潜めながらも陰険に嫉妬による策謀を凝らすフランシス・ラヴィル(Frances Lovill)などの生き生きとした鮮やかな存在感は、それだけでもこの作品をかなり面白い作品にしており、ハー

7) Cf., "It is surely wrong to isolate the lesser novels as separate and distinct, as aberrations and failures. They play an essential part in the dynamic process of the development of Hardy's fiction, and each stage of his career contributes to the integrity of the whole. To exclude the seven less successful novels is to distort his career and to disguise the interpenetrating unities of his fiction.", Richard H. Taylor, *The Neglected Hardy: Thomas Hardy's Lesser Novels* (London and Basingstoke: Macmillan, 1982) 3.

ディ的な皮肉に満ちた笑劇(farce)となっているようである。

II

『エセルバータの手』では、エセルバータが家族の経済的な基盤と、より高い社会的な身分を獲得するために、いわば自己犠牲のように、妹のピコティ(Picoty)をかつての自分の恋人と結ばせ、老人の貴族マウントクレア卿との結婚を決意するのであるが、「運命と青い外套」では、アガサが老人の農場主ラヴィルと結婚するのは、叔父に借金返済の相殺のために彼との結婚を強いられ、うごめく陰の策謀のために彼女自身が書かざるを得なくなった結婚を約束する文書と、偶然とはいえいつの間にか恋敵に回してしまったフランシス・ラヴィルに対する女としての意地によるものである。

作品は、主人公の娘アガサ・ポリンが、青い秋物の上着を着ていたために、村一番の美しい娘フランシス・ラヴィルと間違えられて、好青年として村の娘たちがあこがれるオズワルド・ウィンウッド(Oswald Winwood)に声を掛けられる所から始まる。

“Good morning, Miss Lovill!” said the young man, in the free manner usual with him toward pretty and inexperienced country girls.

Agatha Pollin—the maiden addressed—instantly perceived how the mistake had arisen. Miss Lovill was the owner of a blue autumn wrapper, exceptionally gay for a village; and Agatha, in a spirit of emulation rather than originality, had purchased a similarly enviable article for herself, which she wore to-day for the first time. It may be mentioned that the two young women had ridden together from their homes to Maiden-Newton on this foggy September morning, Agatha prolonging her journey thence to Weymouth by train, and leaving her acquaintance at the former place. The remark was made to her on Weymouth esplanade. (19)

ハーディ作品の「語り」の技法に関わる書き出しについてはまた論をあらためるが、会話から始めるいわゆる「物語の渦中に」(im medias reis)的な手法によって、物語の展開が急速に進展していくことになる。いわゆる全知の語り手による物語の進め方には、当時の他の作品と比べてさほど変わりはないが、短篇小説の緊密さを意識したその書き出しと場の設定は興味深い。「いつもの

気さくな様子で」(in the free manner usual with him) 挨拶の言葉を、ひとりの娘を名指しながらも複数の娘たち (...toward pretty and inexperienced country girls) に声を掛けるこの若者は、実はお目当てのミス・ラヴィルを直接知っているわけではない。彼が知っているのは、噂でミス・ラヴィルが村一番の美人であり、いつも青い外套を着ているということだけである。そして声を掛けられたふたりの村娘たちの中で、青い上着を今日初めて着たアガサは、自分がミス・ラヴィルに間違えられたことに気づく。アガサは、年上の大人っぽいミス・ラヴィルに対抗するかのよう、村ではいささか派手な青い上着を買って着ていたのである (a blue autumn wrapper, exceptionally gay for a village; and Agatha, in a spirit of emulation rather than originality, had purchased a similarly enviable article for herself, which she wore to-day for the first time.)。一方のアガサ自身も、オズワルドに対する関心は噂や遠目に見ることによって募らせていただけである。

Only in secret had she acquired this interest in Winwood — by hearing much report of his talent and by watching him several times from a window;... (20)

オズワルドとアガサふたりの出会いが偶然の間違いによって出来上がりながらも、この若者オズワルドを巡る三角関係、ハーディ作品の基本的なパターンともいえるいわゆる「永遠の三角関係」(eternal triangle)の人間模様、男女のしがらみの模様がここで早くも透けて見えてくる。

さらにまたここに、滑稽ともいえる相手の取り違えの喜劇が見られる。「青い外套」というたったひとつの最初の手がかり、いわばインデックスが、男女の繋がりやのきっかけを簡単に作り上げてしまうことになるのである。記号論的に捉えれば「青い外套」といういわゆるシニフィアンが、ミス・ラヴィルをシニフィエとしていることを、オズワルドは単純にも疑わない。ここに彼の浮薄さを見ることは簡単だが、こうした偶然の「間違い」(mistake)が、性を介在させて作り上げる男と女の恋愛と結婚という繋がりやの普遍的な謎、多様さのきっかけとなっていることは、ハーディがその創作において明らかにしようとしているものである⁸⁾。

先に、場の設定として短篇小説という形式が意識されていることを指摘したが、それは「その若者」(the young man)と定冠詞で示されることによって、読

8) "... the question of matrimonial divergence, the immortal puzzle — given the men and women, how to find a basis for their sexual relation — ...", Preface to *The Woodlanders*.

者は物語の中で情報の共有を強いられ、さらに畳みかけるように「彼のいつもの気さくな様子で」と、「彼」という代名詞が持つ同様の情報の共有化と「いつもの」(usual)という言葉による日常化の働きによって、我々読者は冒頭から瞬時にこの場面の中に、物語の渦中に放り込まれることになるのである。「その若者」、「いつもの気さくな様子」を見せる「彼」が一体誰であるかは、しばらく後で次のように明らかにされる。

Now, were the speaker, Oswald Winwood, to be told that ... (19)

小気味よい展開で始まった物語で、我々読者は、この3人、アガサ、オズワルド、そしてミス・ラヴィルが、ハーディの作品に見られる基本的な三角関係を形作ることを、この物語の冒頭で理解するように仕組まれているとってよかろう。村の娘たちがあこがれる気さくで知的な好青年オズワルド、村一番の美人として評判の高いミス・ラヴィル、そして彼女に適わないと思いながらもオズワルドにあこがれるアガサ、この恋愛の力関係とその根底に潜むライバル意識と自我に基づく意地は、後の「妻を喜ばすために」(‘To Please His Wife’, 1891)の3人の男女を思い起こさせる。

ミス・ラヴィルに間違えられたアガサは、彼の単純な間違いに気づきながらもそれを正すことをしない。それは彼が挨拶の後に続けて言った言葉に反駁し得ることである。

Agatha was now about to reply very naturally, “I am not Miss Lovill,” and she went so far as to turn up her face to him for the purpose, when he added, “I’ve been hoping to meet you. I have heard of your — well, I must say it — beauty, long ago, though I only came to Beaminster yesterday.”

Agatha bowed — her contradiction hung back — and they walked slowly along the esplanade together without speaking another word after the above point-blank remark of his. It was evident that her new friend could never have seen either herself or Miss Lovill except from a distance. (19)

ミス・ラヴィルの美しさを噂に聞いていて会いたくて昨日やってきたばかりだと言うオズワルドの言葉に、「ひと間違いだと言おうとする気持ちが引っ込んだ」アガサの心理は、器量では適わないにしても若さでは勝っている若い娘の心理としてごく普通のものであろうし、彼女に対抗する気持ちもごく当たり

前のものである。「村ではひどく派手な青い上着」(a blue autumn wrapper, exceptionally gay for a village)を買っていること自体が、ミス・ラヴィルに対する対抗心を表しており、同時に、「青い外套」を持っているミス・ラヴィルとともに、自我を持って自己を主張する「新しい女」(a new woman)の片鱗を見ることができる⁹⁾。冒頭で、「かわいらしいうぶな田舎の娘たち」(pretty and inexperienced country girls)と、個々人の個性を消してしかも「田舎の娘たち」と軽んじるようにまた集合的な捉え方に対して、現実にはそうした捉え方を否定するように様々な個性の持ち主が存在するという、さらには彼女たちが決して「かわいらしいうぶな」娘たちばかりではないということが、物語の結末において皮肉として浮かび上がってくることになっている。この集合として捉えられた娘たちの中で、ひとりの、あるいはふたりの自我を持った強い個性が、それぞれの心理によって発現し結果としてその言動で示され、物語の原動力となっているのである。いうまでもなくそのひとりであるアガサの若さとその心理は、物語の展開において、重要な牽引力となっているのであり、物語結末で、叔父の妻となったフランシス・ラヴィルと対峙する場面では、「かわいらしいうぶな田舎の娘たち」のひとりであったはずの彼女は、負けん気の強い、自我を持った、自尊心の強い大人の女性に、大げさに言えば近代的な女性、「新しい女」に変貌するのである。

「かわいらしいうぶな田舎の娘たち」に声を掛けたオズワルドは、「青い上着」を指標としてミス・ラヴィルを特定化し選別しようとする。男女の繋がりのきっかけとしては、『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*, 1891)での、「5月祭りの踊り」(the May-Day dance)¹⁰⁾で、踊っている村の娘たちと通りがかったエンジェル・クレア(Angel Clare)とその兄たち、そして踊りに加わるエンジェルと娘たちの場面が思い出される。何ら関わりのない男と女が、何をきっかけとしてお互いを特定化し合い繋がりを持つに至るのか、その偶然と神秘が、ハーディの追求するひとつの問題であることに異論はなからうけれども、この場面でもそれを窺うことができよう。しかもハーディは、そこにギリシャ神話のイメージを重ねることによって、おそらくは田舎と田舎に住む人々や農民に対して単純な偏見を持っているスノッビッシュな都会の読者を意識してか、たとえ田舎の農村においても、男女の出会いとその組み合わせが、トロイ

9) この点では例えば「夢見る女」('An Imaginative Woman', 1983)のエラ(Ella)を含め、ハーディの描いた一連の女性たちに共通する。

10) Chap. 2.

のヘレンを巡る大騒動のように、壮大なドラマとなりうることを暗示している。

Now, were the speaker, Oswald Winwood, to be told that he had not lighted upon the true Helen, he would instantly apologize for his mistake and leave her side, contingency of no great matter but for one curious emotional circumstance — Agatha had already lost her heart to him. (19-20)

田舎であれ都会であれ、また農民であれ貴族であれ、およそ偶然(contingency)でしかない男女の出会いと恋愛、そして結婚を巡るドラマが、人間同士の繋がりにとって普遍的なものであり、喜劇的な側面、悲劇的な側面の双方を持ちうることは、ハーディが描き出している多様な男女模様でも明らかなことである。

ヘレンに例えられるミス・ラヴィルを、アガサと取り違えてしまうオズワルドの軽率さは、神話のイメージとの落差ゆえに大きな滑稽さを生み出しているとともに、「青い外套」を見たとたんその実体を疑うことなく、関係性の繋がりを求めようとするところには、媚薬によって初めて目にしたものを恋してしまうシェイクスピア(William Shakespeare)のどたばた喜劇『夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*)を想起させる。頭をロバの頭に取り替えられてしまった職人を恋するタイターニア(Titania)ほどではないにしても、噂という媚薬と遠目からの「青い外套」による勘違い、さらには、洗濯中に驚いて下着を流してしまい、その驚きと恥じらいを含んだ仕草で、老人の農場主ラヴィルを恋の虜にしてしまうアガサとその農場主ラヴィルとの関係なども、偶然の間違いや年齢の差に絡む恋や結婚の釣り合いのちぐはぐさを作り出してほどよい喜劇となっている。

III

『カスターブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*, 1886)において、マイケル・ヘンチャード(Michael Henchard)は、18年前に酒に酔った勢いで競りに掛けて売り飛ばした妻スーザン(Susan)と娘エリザベス=ジェイン(Elizabeth=Jane)が、町長となっている自分を頼ってやって来た時に、そのエリザベス=ジェインを実の娘と思い込む。18年という時間の距離は、オズワルド

ドが遠くからしかミス・ラヴィルを見ていないことと同様に¹¹⁾、人の取り違えの原因となっている。エリザベス=ジェインの髪の毛の色合いが赤ん坊の時と違うことによく疑問を抱いたヘンチャードは、やがて、亡くなった妻スーザンの遺書から、今のエリザベス=ジェインは妻と娘を買ってくれた水夫ニューソン(Newson)との間に出来た娘で、実の娘で無いことを知る。名前が同じであるために、名前というシニフィアンが誘導するシニフィエが、ヘンチャードとスーザンとでは微妙に異なっているのである。スーザンにとっては、ニューソンとの間に出来た娘に、ヘンチャードとの間に出来た亡くなった娘と同じ名前をつけることは、亡くなった娘のシニフィアン、亡くなった娘を想起する媒介にもしていると考えてよいだろう。

オズワルドにとって「青い外套」は美しいと評判のフランシス・ラヴィルを誘導するシニフィアンに他ならない。実体、つまりシニフィエがアガサであることにいつまでも気づかないオズワルドは、一緒に散歩しているうちに次第にアガサに夢中になってゆく。一日の終わり、別れ際に初めて彼は彼女から真実を、間違いを知らされる。

They reached Maiden-Newton at dusk, and went to the inn door, where stood the old-fashioned hooded van which was to take them to Beaminster. It was on the point of starting, and when they had mounted in front the old man at once drove up the long hill leading out of the village.

“This has been a charming experience to me, Miss Lovill,” Oswald said, as they sat side by side. “Accidental meetings have a way of making themselves pleasant when contrived ones quite fail to do it.”

It was absolutely necessary to confess this time, though all her bliss were at once destroyed.

“I am not really Miss Lovill!” she faltered.

“What! not the young lady — and are you really not Frances Lovill?” he exclaimed, in surprise.

“O forgive me, Mr Winwood! I have wanted so to tell you of your mistake; indeed I have, all day — but I couldn’t — and it is so wicked and wrong of me! I am only poor Agatha Pollin, at the mill.”

11) “... her new friend could never have seen either herself or Miss Lovill except from a distance.”, 19.

“But why couldn't you tell me?”

“Because I was afraid that if I did you would go away from me and not care for me any more, and I l — l — love you so dearly!”

The carrier being on foot beside the horse, the van being so dark, and Oswald's feelings being rather warm, he could not for his life avoid kissing her there and then.

“Well,” he said, “it doesn't matter; you are yourself anyhow. It is you I like, and nobody else in the world — not the name. But, you know, I was really looking for Miss Lovill this morning. I saw the back of her head yesterday, and I have often heard how very goodlooking she is. Ah! suppose you had been she. I wonder —”

He did not complete the sentence. The driver mounted again, touched the horse with the whip, and they jogged on.

“You forgive me?” she said.

“Entirely — absolutely — the reason justified everything. How strange that you should have been caring deeply for me, and I ignorant of it all the time!”

(20-21)

ここではさながらシェイクスピアのロミオ(Romeo)とジュリエット(Juliet)の会話がパロディ化されているといってもよかろう。「僕が好きなのは君であって、この世の他の誰でもないんだ一名前じゃないんだ」(It is you I like, and nobody else in the world — not the name.)と、オズワルドがアガサに衝動的な思いを打ち明けるように、恋の虜となってしまったオズワルドとアガサにとっては、もはや名前も「青い外套」も関係のないことである。シニフィアンが消し去り、オズワルドという名前を持った実体としてのひとりの若者とアガサという名前を持ったひとりの実体としての娘とが、こうして男女のひとつの繋がり、「共感の通路」(a congenial channel)を見出してゆくのである¹²⁾。

そのオズワルドが立身出世のためにインドに渡り、次第に地歩を固めつつあ

12) Cf., “Ella Marchmill, sitting down alone a few minutes later, thought with interested surprise of Robert Trewe. Her own latter history will best explain that interest. Herself the only daughter of a struggling man of letters, she had during the last year or two taken to writing poems, in an endeavour to find a congenial channel in which to let flow her painfully embayed emotions, ...”, ‘An Imaginative Woman’, 下線は筆者。

ることを、アガサは手紙のやりとりで知ってゆく (Part III)。「手紙」(letters), つまりは書かれた言葉の存在は、ふたたびそれぞれの存在のシニフィアンとして機能し合い、ひとたび出来た繋がり、「共感の通路」を維持してゆくといえるが、その状況は「西部巡回裁判の途上で」(‘On the Western-Circuit’, 1891)において手紙のやり取りによって繋がりを深めながらも代筆であるが故に皮肉な結び付きに至ってしまう状況を連想させる。

オズワルドが不在という状況に、老人の農場主ラヴィルがいわば彼の恋敵としてアガサの前に登場する。その名前 ‘Lovill’ に込められた寓意性にも増して、「年老いた若者」(aged youth, 26)である彼はアガサへの恋心を募らせてゆく。その庄巻となっている場面が、夜の暗がりの中アガサの姿をひと目見ようと彼女の家の窓の下までやってくる場面である。

The doting old person thought of the young one all this day in a way that the young one did not think of him. He thought so much about her, that in the evening, instead of going to bed, he hobbled privately out by the back door into the moonlight, crossed a field or two, and stood in the lane, looking at the mill — not more in the hope of getting a glimpse of the attractive girl inside than for the pleasure of realizing that she was there.

A light moved within, came nearer, and ascended. The staircase window was large, and he saw his goddess going up with a candle in her hand. This was indeed worth coming for. He feared he was seen by her as well, yet hoped otherwise in the interests of his passion, for she came and drew down the window blind, completely shutting out his gaze. The light vanished from this part, and reappeared in a window a little further on.

The lover drew nearer; this, then, was her bedroom. He rested vigorously upon his stick, and straightening his back nearly to a perpendicular, turned up his amorous face.

She came to the window, paused, then opened it.

“Bess its deary-earry heart! it is going to speak to me!” said the old man, moistening his lips, resting still more desperately upon his stick, and straightening himself yet an inch taller. “She saw me then!”

Agatha, however, made no sign; she was bent on a far different purpose. In a box on her window-sill was a row of mignonette, which had been sadly neglected since her lover’s departure, and she began to water it, as if inspired by

a sudden recollection of its condition. She poured from her water-jug slowly along the plants, and then, to her astonishment, discerned her elderly friend below.

“A rude old thing!” she murmured.

Directing the spout of the jug over the edge of the box, and looking in another direction that it might appear to be an accident, she allowed the stream to spatter down upon her admirer’s face, neck, and shoulders, causing him to beat a quick retreat. Then Agatha serenely closed the window, and drew down that blind also.

“Ah! she did not see me; it was evident she did not, and I was mistaken!” said the trembling farmer, hastily wiping his face, and mopping out the rills trickling down within his shirt-collar as far as he could get at them, which was by no means to their termination. “A pretty creature, and so innocent, too! Watering her flowers; how like a girl who is fond of flowers! I wish she had spoken, and I wish I was younger. Yes, I know what I’d do with the little mouse!” And the old gentleman tapped emotionally upon the ground with his stick. (26-27)

『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*)のバルコニー・シーンのパロディとおぼしき階上の窓辺のアガサと、彼女を慕い夜の暗がりの中を窓の下まで忍んで近づいてくる老農場主ラヴィルは、非常に滑稽な場面を呈している。身軽で柔軟な若者ではない背の曲がった恋煩いの老人ラヴィルは、アガサを間近に見たいばかりに杖に持たれながらその曲がった背を少しずつ伸ばす。一方のアガサは、老人が窓の下にいることにふと気づき、素知らぬ顔をして「モクセイソウ」(*mignonette*)への水遣りの水を下にいる老人に浴びせかける。背が曲がっているがために背中に伝い流れるしずくも満足に拭けないラヴィルは、この出来事でおお層アガサへの思いを募らせ彼女の叔父の借金を利用して彼女に結婚を迫るのである。

アガサとラヴィルの上下の位置関係は、結婚後の彼女とラヴィルの関係をほめかしていると考えてもよいだろう。『エセルバータの手』のエセルバータがマウントクレア卿を結婚後押さえつけてゆくように、アガサもミス・ラヴィルへの対抗心から老農場主ラヴィルを夫として認めつつ、後の家庭内での彼女の支配力をここで暗示させているのである。

The bride, though nearly slain by the news, would not flinch in the presence of her adversary. Stilling her quivering flesh, she said smiling: "That information is deeply interesting, but does not concern me at all, for I am my husband's darling now, you know, and I wouldn't make the dear man jealous for the world." And she glided down stairs to the chaise. (40)

また同時に、アガサが水を遣る「モクセイソウ」の持つ花言葉が暗示するように、この上下の位置関係と「モクセイソウ」のイメージとが、この滑稽な場面でアガサの本質を皮肉にも浮かび上がらせているといってもよいだろう¹³⁾。

IV

「運命と青い外套」と題されたこの短篇は、「運命」(destiny)を「運命の女」(femme fatale)たるフランシス・ラヴィルに重ねることができよう。アガサに取って代わられたフランシス・ラヴィルは、その事実を偶然にも一緒に乗り合わせた馬車の中で知ることになる。

They descended into Beaminster and alighted, Oswald handing her down. They had not moved from the spot when another female figure also alighted, dropped her fare into the carrier's hand, and glided away.

"Who is that?" said Oswald to the carrier. "Why, I thought we were the only passengers!"

"What?" said the carrier, who was rather stupid.

"Who is that woman?"

"Miss Lovill, of Cloton. She altered her mind about staying at Beaminster, and is come home again."

"Oh!" said Agatha, almost sinking to the earth. "She has heard it all. What shall I do, what shall I do?"

"Never mind it a bit," said Oswald. (21-22)

ミス・ラヴィルはこの後姿を潜めるけれども、その存在は不気味なほどに大

13) Cf. *mignonette* = qualities surpass your charms, 石川林四郎『英文學に現はれたる花の研究』(東京: 研究社, 大正十三年; 東京: 八坂書房, 1980年) 332.

きい。アガサにオズワルドを奪われたミス・ラヴィルは、アガサの叔父の後妻の座に納まる。それが、アガサに対する復讐のためであることが、ラヴィル老人と結婚式を挙げるアガサに対して直接明らかにされるのである。

“Ah, no. And how you struggled to get him away from me, dear aunt!”

“And have done it, too.”

“Not you, exactly. The Parson and fate.”

“Parson Davids kindly persuaded you, because I kindly persuaded him, and persuaded your uncle to send you to him. Mr Davids is an old admirer of mine. Now do you see a wheel within a wheel, Agatha?” (39)

「共感の通路」(a congenial channel)をひとりの若者オズワルドに求め繋ごうとしたふたりのささやかなライバル心が、ミス・ラヴィルの嫉妬に満ちた復讐心を生み出し、そのあげくにふたりとも意に沿わぬ結婚をし、ともに愛してもいない男との繋がりを創り上げてしまわざるを得ないその皮肉な結末は、ハーディ自身のこの短篇に対する評価にも関わらず佳品に仕上がっているとみなしてよいだろう。タイトルにある「運命」(destiny)は、アガサの言葉の中で「司祭と運命」(the Parson and fate)としてひとつの定冠詞でくくられているが、司祭の俗物性も含め「運命」なるものも人為的な「込み入ったからくり」(a wheel within a wheel)かもしれないのは、ハーディが描き出そうとした人間の心の奥に潜んでいる衝動性や動物的な性欲といった、非理性的なものに関わるものかもしれない。そうしたことを示唆する物語の展開と、センセーション・ノベルさながらのその背後にうごめいた真実の暴露の面白さばかりでなく、アガサの自我を持った若やいだ存在感は注目に値する。のみならず、姿を見せずに復讐の手を延ばし、アガサを老人と結ばせるフランシスは、ある意味では「エセルバータの手」以上に「運命」の「手」を担い演じている。そうした点でもこの作品は埋もれるべき作品ではないと考えてよいと思われる。